

# 神奈川大学・浙江大学 第10回日中学術交流シンポジウムの報告

人文学研究所所長 鈴木陽一

日時：2000年10月16日～17日

会場：浙江大学西溪キャンパス

日本側代表団：

- 鈴木陽一（神奈川大学人文学研究所所長）
- 橘川俊忠（神奈川大学常民文化研究所所長）
- 鈴木修一（神奈川大学外国語学部教授）
- 中村浩平（神奈川大学外国語学部教授）
- 望月真澄（神奈川大学外国語学部教授）

## (1) 報告者とテーマ

10月16日（月）

開会の挨拶 寥可斌（浙江大学人文学院副院長）  
鈴木陽一（神奈川大学人文学研究所所長）

1. 中村浩平（神奈川大学外国語学部教授）  
「長谷川照子ー反戦活動に一生を捧げたエスペランティスト」
2. 王宝平（浙江大学日本文化研究所教授）  
「清代の檔案資料から見た東文学堂」
3. 橘川俊忠（神奈川大学常民文化研究所所長）  
「近世日本における儒者の社会的地位」
4. 鈴木修一（神奈川大学外国語学部教授）  
「露伴、漱石、鳴外の作品から見たニーチェ」

10月17日（火）

1. 望月真澄（神奈川大学外国語学部教授）  
「白居易の詩の押韻について」
2. 張涌泉（浙江大学古籍研究所教授）  
「日韓漢字の起源を探る」
3. 李明友（浙江大学哲学系教授）  
「太虚法師の人間仏教思想」

## (2) その他

### 1. 自由交流

10月17日午後、日本側の報告者は関連研究所、学部を訪問し、今後の学術交流のあり方について自由に議論を行った。

## 2. 全体の総括と今後の学術交流について

10月17日午後3時より全体の総括と、今後の交流のあり方について議論を行った。主たる内容は以下の通りである。

- ①今後も両研究所を母胎とし、両大学の学術交流の更なる発展を目指して双方が努力する。この目的のために、現行のシンポジウム形式を更に充実せしむるよう双方は努力する。
- ②学術成果の公表については、現行の形態は2000年度刊行分をもって最後とし、今後の形態については引き続き協議する。
- ③より広範な研究者の参加が可能になるよう、より具体的かつ豊かな研究成果が生み出されるよう双方は努力する。

(附記) 以上の内容については、帰国後、日本滞在中の王勇日本文化研究所所長と鈴木陽一との間で協議し、意見の一致を見たものが含まれる。

なお、この他、10月17日には、前期シンポジウムと平行して、本学外国語学部教授大里浩秋、同専任講師孫安石両氏と、浙江大学日本文化研究所、同教育系との共催により、「日本における中国人留学生問題」のシンポジウムが開催された。報告者とテーマは以下の通りである。

1. 大里浩秋 (神奈川県外国語学部教授)  
「中国人日本留学史研究の現状」
2. 田正平 (浙江大学教育系教授), 楊曉 (遼寧師範大学教授)  
「清末留日政策－五校特約を中心として」
3. 孫安石 (神奈川県外国語学部専任講師)  
「中国留学生の生活調査」
4. 呂順長 (浙江大学日本文化研究所講師)  
「清末中日教育交流二題」
5. 謝志宇 (浙江大学外語学院助教授)  
「中国現代作家と日本社会」

☆本シンポジウムは、両大学の交流を基礎としながら、専門的なテーマに基づく独自の、科研費の獲得による学術交流である。両大学の今後の学術交流の一つの方向性を示すものとして、今後とも研究所はこうした活動に協力していくものである。

## 講演会要旨

開催日：2000年10月7日（土）午後2時30分  
～午後5時30分

会場：神奈川大学人文学研究所資料室（17号館216号室）

講演者：菅原 昭氏（神奈川大学経済学部非常勤講師）

演題：「タイ国民経済への一つの接近方法——戦間期タイ国民経済形成と農村市場」

本報告は、タイ国民経済形成期における周縁部地方市場あるいは農村市場の様態を明らかにすることで、発展途上国の国民経済形成の一端を開示することを試みたものである。

まず、タイにおいて国民経済という概念を使用するにあたり、その定義を提示した。一つには、国民経済成立の前提となる国民国家の成立（四つの要件）である。二つ目は、各地域間の経済統合あるいは市場統合の条件となる鉄道を中心とした社会資本整備の推進と、関連する基礎的産業であるセメント産業の輸入代替工業化の達成、そして製造業発展の潜在的可能性を示す機械修理部門における事業体の成長などである。以上のことをもって、タイが1930年代に国民経済成立の根拠とした。そして、ここでは国民経済の内実を迫る接近方法の一つとして、国民経済の末端市場でもあり、最大の担い手である農民が深く関わる農村市場がどのような様相を呈していたのかを考察の対象に選択した。ただ、課題とした農村市場の実態については、資料上の制約から戦間期を通年で考察することが不可能なために、1930年代に二回に渡り実施された農村調査報告書を加工分析し検証した。

報告の結論として、米は各地域間の鉄道移出商品としてのみならず農村市場における流通商品としても重要な商品の地位を占めていることを明示した。とりわけ鉄道による最大の移出地域である東北部の米は、二つの顔を持っているといっても

よい。糯米の内向きの顔と粳米の外向きの顔である。米の総生産量と域内消費、そして域内流通の中心は糯米である。他方、鉄道建設効果による換金作物として急速に栽培が普及し、飛躍的な移出量の増大をもたらしたのが粳米である。米の価格形成においても域内需給を軸に安定した価格推移を示す糯米と、世界市場価格などの域外（海外）需要因に連動した価格推移を示す粳米というように需給関係が二重に交錯している。ただし、後者はナコーンラーチャーシーマー周辺に限定されており、東北部農村市場の柱が糯米であることに変わりはない。なぜなら東北部の米市場は、無機質な量的需給要因だけでなく、「糯米を常食にする食文化」という文化的要因も重要な市場規定要因として市場規定要因として市場基盤を支えているからである。（文責：菅原 昭）

開催日：2000年10月18日（水）  
会場：神奈川大学人文学研究所資料室  
（17号館216号室）  
講演者：広瀬友久氏（大妻女子大学教授）  
演題：「イギリス・ロマン主義の自然観」

ロマン主義は近代化批判として理解することができる。すなわちロマン主義は、近代における無際限な欲望の拡大に対して、コントロールする機能を果たすのである。

イギリス・ロマン派のコウルリッジは、階層秩序の崩壊した近代という時代のなかで、新たに個と普遍、有限と無限の媒介という問題を立てたのだった。それは彼によって「構想力」として考えられている。彼の言う「構想力」は、無限な宇宙理性と個人の有限な理性をつなぐ飛躍として理解することができる。それを担うのがシンボルであって、なかでも最高のシンボルが詩である。ロマン主義はこうした美的なシンボルによって、有限から無限への飛躍をなそうとする。近代的な理性では、このような飛躍は生まれえない。

ロマン主義の芸術家には、自然から自分を遠ざけ、内面へと向かうという志向がある。それでも自分の孤独な内面に、内的な自然、すなわち生命を見出すのである。こうしてロマン主義は、孤独のなかで自然と一体となり、自然のなかに永遠の真理を発見しようとする。それはアルプスのような自然における崇高な美であり、近代のなかで失われた神に代わる自然の無限性である。こうしてロマン主義は、自然の崇高さを眼前にして、近代的な個人を無際限な欲望から解放し、近代化にたいする異議申し立てを遂行しようとしたのである。

\*

広瀬氏のこのような研究発表は、文学的であるとともに、哲学的でもあり、ドイツ・ロマン主義との対比をする上でも興味深い問題を投げ掛けていただいた。ロマン主義の自然観の比較研究という方向で、今後とも共同研究を進めてゆきたい。

（伊坂青司記）

## 執筆者紹介

鳥	越	輝	昭	本学外国語学部教授
水	野	光	晴	本学外国語学部教授
高	野	繁	男	本学外国語学部教授
湯	田		豊	本学外国語学部教授

## 編集後記

今号は表紙にささやかな改革を試みました。人文学研究の内容によりふさわしい表紙でより多くの読者をとらえたいという願いのもと、当初は大改革を試みましたが、さまざまな制約のなかで、結局は最小限の改革にとどまりました。11月の原稿締切りから3月の発行に至るプロセスのなかで、必要とされている数々の改革とともに、さらなる表紙の改革についても、次号より編集を担当していただく新常任委員会に託したいと思います。

「自著紹介」の原稿をお寄せくださった筧敏生先生は、2001年2月22日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

(Y)

---

人文学研究所

所 長  
国際交流  
所 報  
会計・講演  
図 書  
共同研究・叢書

鈴 木 陽 一  
後 藤 政 子  
山 口 ヨシ子  
大 西 勝也  
寺 野 清治  
沢 正 晴

---

人文学研究所報 No.34

二〇〇一年三月二五日 印刷  
二〇〇一年三月三一日 発行

頒価 一、〇〇〇円

編集兼  
発行人

横浜市神奈川区六角橋三一二七一  
神奈川大学人文学研究所

代表者 鈴木陽一

印刷所

電話〇四五(四八)五六六一(代表)  
横浜市中区石川町五一八五―五  
株式会社  
エイコーコーポレーション  
電話〇四五(六六四)二二〇九(代表)